僕は使い魔？

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕は使い魔？

【Ｎコード】
Ｎ９０３５Ｃ

【作者名】
鷹嶺綺羅

【あらすじ】
水瀬、異世界に召還される！？しかも召還された先は――――！ヤマグチノボル先生著「ゼロの使い魔」短編連作その１です。

（前書き）

あくまで冗談ですので（^―^；）

「水瀬君」
美奈子が“それ”を見たのは、学校の昼休みだった。
古ぼけた、何の変哲もない金属製の栞。
美奈子にはそう見えた。
「おばあちゃんから借りたんだ。多分、マガイモノ」
お茶を飲みながら、水瀬はなんでもない。という顔だ。
「マガイモノ？――――呪具とか？」
「栞を挟んだ本の中に行くことが出来るんだって」
「成る程？うさんくさい」
「でしょ？」
水瀬はさっき図書館から借りてきたばかりのライトノベルをカバンから取り出した。
美奈子から、「これ、よくわかんないけどアニメ化するんだって」と言われ、それだけで借りてきた本。
まだ中身は読んでいない。
そんな本。
水瀬は、その本に栞を挟んだ。
何も考えずに。

それは美奈子が一瞬、水瀬から目をそらせた時の出来事。

「そういえば水瀬君」
振り返った美奈子は凍り付いた。
にぎやかな教室。
クラスメート達が思い思いの時間を過ごす中、
「――――水瀬君？」

水瀬悠理の姿が、教室から消えた。

「あんた誰？」

天国まで通じているんじゃないか。

そう錯覚してしまうほど、高く晴れ渡った空を背に、水瀬の顔をのぞき込んでいる女の子が言った。

珍しい黒いマントを羽織った少女の目は、明らかにあきれ果てていた。

桃色がかったブロンドの髪。透き通るような白い肌の色が、青い空の下、一枚の絵のようにすら感じられる。

悪くないな。

水瀬はそう思った。

「ねぇ」

少女はしびれを切らしたように再び言った。

「あんた、誰？」

「そういう君は？」

「どこの平民？」

「平民？」

水瀬は自分が草原に寝転がっていること。

そして少女と同じ黒いマントを身につけ、手に木の棒らしい何かを持つ少年少女達がいることを知った。

「ルイズ、『サモン・サーヴァント』で平民を呼びだしてどうするの？」

少女達の誰かからそんな声が上がり、それをきっかけに周囲は爆笑に包まれた。

ルイズというのがこの少女で、平民が自分を指す言葉。

そして、爆笑は決して少女に対して好意的な意味を持たないことは水瀬には明白だった。

「ちょ、ちょっと間違えただけよ！」

少女は怒鳴った。
鈴を鳴らしたような、品の良いよく通る声だ。
「間違いばかっかりだろうが」
「さすがは“ゼロのルイズだ”」
よくわかんないけど、笑わない方がいい。
水瀬はそう思った。

それにしても――

水瀬は改めて周囲を見回した。
こんな広い平原、日本にあるとしたら北海道。
でも、季節は冬。
遠くには中世ヨーロッパを彷彿とさせる石造りの建造物が見える。

日本じゃないな。

水瀬にわかるのはその程度だ。
とりあえず、何でだか知らないけど、言葉が通じるのだけは有難い。

少女は必死に何かを訴えていた。
もう一回とか、お願いですとか。
一々何かを言うたびに腕をぶんぶん振り回すあたり、他人への意思表示は下手とみえる。
「ミス・ヴァリエール。何か言ったかね？」
「ミスタ・コルベール。も、もう一度、召還を――」
「それはダメだ。決まりなのだからね。――今回の使い魔召還で、君たちの属性を固定し、以降の専門課程への篩い分けとする。つまり、君たちの将来を定める神聖な儀式。それを使い魔の好む好まぬで覆すことは、絶対に許されない」

ミスタ・コルベールは冷たく言い放った。
「儀式を続けなさい」
「――――えっ？」
「君一人のおかげで、一体どれほど授業が中断しているのかわかっているのかね？」
授業。
それでわかった。
これは魔法の授業。
内容は召還。
自分が何故召還されたかわからないが、どうやら少女達は魔法を学ぶ生徒達らしい。
「儀式を続けたまえ」
そうだそうだ。
飛んでくるヤジはどう聞いても、まるで少女をけしかけているようにしか見えない。
「ね、ねぇ」
ルイズは、水瀬に訊ねた。
「お、女の子同士だから……いいよね？」
「へっ？」
「べ、別に男の人と……するわけじゃないんだし」
「ここでマ〇板ショーでもするの？」
「マ〇？」
「ううん？何でもない。忘れて」
「？と、とりあえず、感謝してよね！――――そう！感謝！」
少女は赤面しながら、真っ平らな胸を精一杯反り返らせる。
「き、貴族にこんなことされるなんて、普通、一生ありえないことなんだから！」
「えっ？」
何が何だかわからない。
でも――――似たようなセリフは聞いたことがある。

あれは……。
水瀬は思いだした。
祷子を初めて抱いた晩のこと。
一生懸命、これが普通だ。当然だと力説する祷子の姿は今でもはっきりと思い出せる。
今から考えれば吹き出してしまうけど、祷子は祷子なりに必死だったんだ。

つまり。
少女は何かとてつもなく恥ずかしいことをするつもりだということになる。
周囲の視線の前でナニをするつもりなのかはあえて聞くまい。
元気になるかどうかは少女次第。
出来れば、もっと胸の大きくて年上がいいんだけど……。

内心で期待する水瀬の前で、少女は小さな杖を振った。
「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つのチラかを司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我が使い魔となせ」
魔力の波動は感じるが、聞いたこともない、呪文だか祝詞だかわかんない言葉に、水瀬は判断に迷った。
すっ。
少女はそんな水瀬の額を杖で突く。それだけで、下心を指摘されたようで、水瀬は内心で赤面した。
そんな水瀬に、少女はそっと唇を近づけてくる。
「あ……あの？」
「じっとしていなさい――――すぐ済むから」
「ぼ、僕には心に決めた人が……別れたけど、まだ完全に諦めたワケじゃないっていうか」
「もうっ！じっとしていなさいってば！」

ルイズの左手が、水瀬の頭を乱暴に掴み、その鳶色の瞳が閉じられた。

「っ！」

「んっ……」

自分に何が起きているか？

答え：キスしてる。しかも知らない女の子と。

水瀬はそれを知って、青くなるどころか意識を遠のかせた。

殺される！

本気でそう思ったから。

綾乃ちゃん……。

水瀬は嫉妬のカミサマにお願い、というか、懇願した。

もう集中治療室はイヤです。どうせなら日帰り退院出来る程度に抑えてください……あっ。でも、どっちにしても殿下も黙ってるはずないし……。

怒って自分に背を向ける日菜子の機嫌を直そうと、彼女の前で土下座する惨めな光景を思い浮かべた水瀬の目には、滝のような涙が浮かんでいた。

オトコとして、少女の柔らかい唇を楽しむべきはずなのに、水瀬は地獄の門の前に立たされた罪人のように震えるしかない。

やがて、ルイズが唇を離した。
「終わりました」
「僕の人生も……」
赤面するルイズには水瀬の呟きは聞こえなかったらしい。
……女の子でよかった。
ルイズの唇がそう動いたけど、水瀬にとってそれは全然救いにもなっていなかった。

「サモン・サーヴァントは失敗したが、コントラクト・サーヴァントには成功したようだな」
コルベールはご満悦な様子だ。
「平民だからねぇ」
「そいつが高位の幻獣だったら契約なんて出来ないって」
生徒達の中からそんな嘲りにも似た笑い声が上がる。
「なっ！ば、バカにしないで！」
ルイズが睨みつけるような顔で立ち上がった次の瞬間――――

キィィィィンッ！！

「きゃっ！？」
「何っ！？」
コルベールやルイズ達は炒り豆のようにはじき飛ばされた。

「うっ……」

一体、どれくらいの時間が経ったのか。
それさえわからない中、ルイズは自分が気絶していたことを知り、何とか起きあがった。
体中のあちこちが痛い。
ルイズは、無理に起きあがって見た光景に絶句した。

草原は一面焼け野原。
遠くではまだ草が燃えていた。
「な……」
何が起きたの？
それさえ言葉にならない。
先生達や仲間達は、死んでいるのか生きているのか、全員がまだ黒こげの地面に転がっていた。

「大丈夫？」
背後からかけられた声にルイズは反射的に振り返った。
「死人は出てないから安心して」
水瀬だった。
「あ、あんた……」
ルイズは自分が震えていることを知った。
平民風情が！
そんな気持ちは、さっきどこかに吹き飛んでいる。
あるのは、目の前の自分より圧倒的に年下の女の子への恐怖そのものだ。
「意外と魔力が強いんだね」
「――――えっ？」
誰にも言われたことのない言葉にルイズは戸惑った。
「でも、ダメだよ？あんな服従の魔法を僕にかけようなんて」
「つ、使い魔と契約すめのは当然よ！」
「おかげでこの騒ぎだよ？」
「だから何が起きたの！？」
「君の魔力をはじき返した。その魔法が暴走した結果」
「……」

「全く……散々な一日だったわ！」

部屋に戻るなり、ルイズはマントをベッドに叩き付けた。
「ただでさえ、みんなからいろいろ言われているのに！」
「まぁまぁ」
水瀬はルイズをなだめるように言った。
「人生、いろいろあるよ」
「誰のせいだと思ってるのよ！」
ぶんっ！
ひょいっ。
ルイズの平手は虚しく空を切る。
「――――っ！」
ルイズの恨めしそうな顔を後目に、水瀬は訊ねた。
「みんな、魔法が使えるんだ」
「メイジは、ね！――――当然でしょう！？」
「そんなに怒るとシワになるよ？」
ルイズは慌てて頬に手をやった。
「えっと？国名がトリスティンで、ここはトリスティン魔法学校」
水瀬は今日一日で学んだことを思い出した。
自分が異世界にいることはイヤでもわかった。
「そう！それで私があなたのご主人様っ！」
「……飛行系の魔法も使えないのに？」
生徒達が飛行系の魔法で移動するのに、ルイズは徒歩で移動。水瀬も仕方なしにつき合ったのを思い出した。
「余計なお世話よ！――――あーっ！もう最低！魔法には失敗するし、こんな女の子にファーストキスあげちゃうし！」
「男の子じゃないから……まだ大丈夫、では」
「心の問題よ！とにかく！いい！？私があなたのご主人様なんだから！私の命令聞いて、命がけで私を守るのよ！？」
「はいはい」
とりあえず、自分が男の子だということは黙っていよう。
水瀬はそう思った。

この子のためだし、女の子としてキスされたとなれば、弁明のしようもあるんだから。
「それで――――魔法は四つだっけ？」
「そうよ。火、水、風、土の４系統。他には虚無がある」
「それだけ？」
「それだけって……」
ルイズには意味がわからない。
「どういう意味？」
「だから」
「四大元素を使う初歩的な魔法の他に、空間とか時空を操る時空系魔法とか、精神系とか」
「……あるワケないでしょう？」
「ないの！？」
「ねぇ」
ルイズはベッドに腰を下ろしたが、その目は興味津々で水瀬を見つめていた。
「それ、私も出来る魔法？」
「四大魔法使えないなら……多分、無理。君の属性にもよるけど」
「教えてよ！それから」
ルイズは立ち上がるなり、水瀬の口に両手の親指を突っ込んで乱暴に引っ張った。
「私のことはご主人様と呼びなさいっ！あなたは私の使い魔なんだから！」
「イヒャイイヒャイッ（痛い痛いっ）！」

（後書き）

ホントに冗談なんですよ？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9035c/

僕は使い魔？

2010年10月8日14時01分発行